研究報告

医療看護研究33　P.87－95（2024）

コロナ禍において地域老人クラブ活動に学生補助員として参加した看護学生の特徴と認識

Characteristics and Perceptions of Nursing Students Who Participated as Student Assistants in Community Senior Citizens Club Activities During the COVID-19 Pandemic

板　井　麻　衣[1)]　ITAI Mai
原　田　静　香[1)]　HARADA Shizuka
仲　里　良　子[1)]　NAKAZATO Ryoko
櫻　井　しのぶ[2)]　SAKURAI Shinobu

要　旨

目的：コロナ禍において地域老人クラブ活動に学生補助員として参加した看護学生の特徴と認識を明らかにすること。

方法：看護学部４年生５名を対象とした。混合研究法を用い、自記式質問紙とインタビューから得られた量的・質的データを分析した。

結果：ボランティア活動参加動機尺度平均点は、知識の習得、職業上での成功、利他主義の順で高く、平均点が最も低かった感情的安寧は活動後に有意な上昇が見られた（$p<.05$）。対象者の語りから【地域活動へのレディネス】【活動のしやすさとしづらさ】【活動参加による自身へのメリット】【対人コミュニケーション機会からの学び】【活動を運営・促進する能力の必要性】【看護的視野の広がり】の６カテゴリが明らかになった。

考察：地域活動へのレディネスが活動によるメリットの認識や主体的に学ぶ姿勢といった好循環をもたらした。活動参加の動機は知識の習得等であったが、活動を通して対人コミュニケーション機会が拡大した結果、感情的安寧を得ていた。地域住民の主体的活動への参加を通して、与えられた役割をこなすという姿勢ではなく主体的に学ぶ姿勢で、活動を運営・推進する能力の必要性や看護的視野の広がりを認識した。

キーワード：新型コロナウイルス感染症、地域老人クラブ、看護学生、ボランティア

Key words：COVID-19, senior citizens club, nursing student, volunteer

Ⅰ．緒言

人生100年時代を見据えて健康寿命の延伸を図るため、地域における高齢者の通いの場を中心とした、介護予防・フレイル対策（運動、口腔、栄養等）や生活習慣病などの疾病予防・重症化予防を一体的に実施する仕組みが検討されている（厚生労働省，2018）。こ

1）順天堂大学医療看護学部
Faculty of Health Care and Nursing, Juntendo University
2）順天堂大学大学院医療看護学研究科
Graduate School of Health Care and Nursing, Juntendo University
（Sep. 29. 2023　原稿受付）（Dec. 20. 2023　原稿受領）

うした高齢者の集いの場において、参加しやすい活動の場の拡大やプログラムの充実、高齢者に対して生きがい・役割を付与するための運営支援などが課題である（厚生労働省，2018）。地域を基盤とする高齢者の自主的な組織に老人クラブがある。公益財団法人全国老人クラブ連合会ホームページによると、仲間づくりを通して、生きがいと健康づくり、生活を豊かにする楽しい活動を行うことが老人クラブ活動目的の一つとされており、高齢者にとって楽しみの場である老人クラブを活用した介護予防やフレイル予防活動の充実や生きがいづくりが望まれる。老人クラブ活動は余暇活動としての意義だけでなく、身体機能と認知機能の低下予防の要因の一つであることが示唆されており、栄養状態との関連も示唆されている（平野 他，2020）。週１回以上の文化活動や地域活動の未実施はフレイルリスクの上昇につながることも明らかにされている（吉澤 他，2019）。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大下において老人クラブでの活動が一部中止または縮小されたことにより、高齢者の更なるフレイル進行が危惧されている。高齢者の不活動化がもたらす影響は身体面だけにとどまらず、他者との交流機会の減少や趣味活動・外出機会の減少によって精神面や認知面に及ぼす影響も大きい。新型コロナウイルス感染症の拡大を防止しながらより効果的な介護予防・フレイル予防活動を展開して行く必要がある。

看護学生にとっても、新型コロナウイルス感染症により学習や課外活動の機会が制限され、学生同士の交流が減少していることに加えて、核家族世帯の増加といった社会背景の中で世代を超えた人々との交流機会や地域とのつながりも減少していることが予測される。これまで看護学生の地域でのボランティア活動は、疾患や障害を抱えて生活する人々に対してや（増谷，2017）、被災地などでも広く行われてきた（中島 他，2013；中川 他，2015；曽根 他，2015）。看護学生としての知識や態度を持って対象を理解し、寄り添う姿勢が地域の中で活かされてきた。コロナ禍においても、感染症対策に関する知識を持った看護学生はボランティア活動の一環として、地域老人クラブ活動を安全に運営する補助的な役割を担うことができると考えた。看護学生が学生補助員として地域老人クラブへ参加することで、高齢者・看護学生双方にとって他者交流や世代間交流の機会を創出することにも繋がる。また、自立した活動を行う住民グループに入り込み、様々な健康レベルや背景の人々・集団と関わることによって、ボランティアを行う看護学生にとって様々な学習効果が得られることも期待される。

看護学生の地域におけるボランティア活動の発展や学習効果、教育機会としての可能性を検討していくためには、コロナ禍という特殊な環境下における看護学生の地域ボランティア活動への参加動機や、ボランティア活動参加の状況とそこから得た認識について明らかにする必要があると考えた。したがって、本研究では、コロナ禍において老人クラブ活動に補助員として参加した看護学生がボランティア活動参加に至った背景や参加動機などの特徴と、ボランティア活動を通して得た認識を明らかにすることを目的とした。

Ⅱ．方法

１．研究デザイン

混合研究法を用い、自記式質問紙及びインタビュー調査によって質的･量的データを並行して収集した（抱井，2015）。収集した量的・質的データをそれぞれ分析し、看護学生がボランティア活動参加に至った背景や参加動機などの特徴と認識について考察した。

２．用語の定義

１）地域老人クラブ

公益財団法人全国老人クラブ連合会（2022）の活動目的を参照し、地域を基盤とし、概ね60歳以上の高齢者が仲間づくりを通して生きがいと健康づくり、生活を豊かにする活動を行う自主的な組織とした。

２）学生補助員

地域老人クラブ活動に参加し、参加者との交流、運動などの活動プログラムにおける運営の補助などをおこなう看護学部４年生とした。今回は、学生補助員のみではなく教員に同行して共にボランティア活動を行った。

３）認識

広辞苑によると、認識とは人間が物事を知る働き及びその内容であり、知る作用及び成果を指す（新村編，2018，p.2243）とある。本研究における認識は、地域老人クラブ活動へ学生補助員として参加しようと考え、実際にボランティア活動を行い、振り返り考える過程で、学生補助員としての活動に対して知りえたこと、生じた思いや考えの内容とした。

３．研究対象者

地域老人クラブにおける学生補助員としての活動に

関心のあるＡ大学看護学部４年生を対象に、学生補助員としての活動に関する説明ならびに研究概要の説明を行った。学生補助員としての活動を自発的に希望し、かつ研究協力への同意が得られた者を研究対象者としてデータ収集および分析の対象とした。成績への利益・不利益について、科目評価への影響についての危惧が生じない時期に研究協力を募った。

４．学生補助員の活動

看護学生が学生補助員として地域老人クラブ活動へ参加するにあたり、Ａ市老人クラブ連合会会長と共に参加目的や意義、学生補助員の役割やボランティア活動内容について協議し、学生補助員が老人クラブ活動へ参加することへの同意を得た。さらに、希望される各老人クラブ会長にも同様の説明を行い、同意を得たクラブで2021年11月から12月に学生補助員としての活動を行った。

学生補助員は各活動日の２週間前からマスクを外しての会話や課外活動といった感染リスクの高い活動を控え、１日２回の検温と体調確認、感染症状や濃厚接触がないことを確認し、サージカルマスクを着用した上で参加することとした。学生補助員は教員と共に複数の老人クラブで学生補助員としての活動を行った。活動内容は、地域老人クラブ参加高齢者への体調確認や検温､アルコール消毒の促しや換気などの感染対策、活動場所や使用物品の準備・片付け・消毒、活動プログラムのサポートと安全確認、交流などであった。

５．データ収集

データは、2021年11月から2022年２月に３種類の自記式質問紙およびインタビューにて収集した。

まず、学生補助員としての活動開始前に自記式質問紙調査を実施した。調査内容は、研究対象者の属性、過去のボランティア経験の有無、ボランティア参加動機（自由記載）、Clary ら（1998）によって開発されたボランティア活動の参加動機を測定する Volunteer Function Inventory（VFI）尺度の日本語版30項目３件法、Clary らの測定項目から坂野ら（2004）が翻訳したボランティア活動から得ている利益尺度５項目７件法、ボランティア活動の満足感尺度３項目７件法（坂野 他，2004）であった。VFI尺度は、感情的安寧、利他主義、職業上の成功、知識の習得、自尊心の高揚の６領域で構成され、構成概念妥当性が確認されている（坂野 他，2002；坂野 他，2004）。

全ての活動終了後にも無記名自記式質問紙調査を実施し、活動を通じて学んだことや感じたこと（自由記載）およびVFI尺度日本語版・ボランティア活動から得ている利益尺度・ボランティア活動の満足感尺度を測定した。

また､研究対象者は学生補助員として複数回活動し、活動毎に作成した活動報告書を自記式質問紙として記載内容を分析対象とした。報告書の内容は、活動した日時や参加人数等の活動状況と、学生補助員として実施したこと・気づいたこと（自由記載）であった。

さらに、全ての活動終了後にインタビュー調査を実施した。インタビューは対象者の希望によりフォーカスグループインタビューもしくは個別インタビューの形式で実施した。フォーカスグループインタビューおよび個別インタビューの双方で同じインタビューガイドを使用し半構成的面接を行い、対象者の同意を得た上で録音した。

６．分析方法

自記式質問紙により収集した回答のうち自由記載を除くデータを集計し、数値データについては記述統計量を算出した。VFI尺度については、学生補助員としての活動開始前後の項目別平均点を対応のあるｔ検定を用いて分析した。分析にはSPSSver24を用い、有意水準は５％とした。

自由記載欄は記述内容について内容分析を行った。インタビューについては録音したデータを逐語録に起こして精読した後、質的帰納的に分析した。VFI尺度の結果および質的帰納的分析により生じたカテゴリを、学生補助員の特徴と参加動機および学生補助員としての活動を通して得た認識の２つのテーマに沿って検討を行った。

７．倫理的配慮

順天堂大学医療看護学部研究等倫理委員会よる承認を得て実施した（順看倫第2021-74）。研究対象者は、成績等への利益・不利益について科目評価への影響についての危惧が生じない時期・状況下で募り、口頭および書面にて説明を行った後、同意書への署名・提出をもって同意を得た。インタビューはグループもしくは個別インタビューのうち対象者が希望する方法で実施した。

Ⅲ．結果

1．研究対象者の概要

研究対象者の概要を**表１**に示す。本研究対象者５名は全て女性で、過去にボランティア経験がある者は４名（80%）であった。過去のボランティア経験の内容として、障害児･者との交流、難病患者への生活支援、車椅子利用者への外出サポート、迷子センターでの活動、募金活動などがあり、ボランティアサークルへ所属経験のある者が２名（40%）であった。学生補助員としての活動回数は１～４回で平均2.8回であった。

2．学生補助員の特徴と参加動機

VFI尺度による６項目の参加動機について、活動前後の平均点を**表２**に示す。VFI尺度平均点は、知識の習得9.0、職業上での成功8.4、利他主義7.6、自尊心の高揚6.2、感情的安寧と社会的つながり4.4あり、知識の習得や職業上での成功といった学習機会としての参加動機得点が高かった。

学生補助員としての活動への参加動機（自由記載）でも、保健師の活動を知る機会になると思ったから、高齢の方と交流したいと思ったから、高齢者への健康支援はどのように行うのか興味を持ったため、臨地実習にほぼ行くことができずその経験を補いたかったから、というように、学習機会としての参加を決意したと読み取れる記述がみられた。

インタビューからは、学生補助員としての活動参加

表１　研究対象者の概要（n=5）

	性別	年齢	ボランティア経験	
			有無	内　容
A	女性	20代前半	あり	障害児・者との交流会参加
B	女性	20代前半	あり	難病患者の外出や生活支援
C	女性	20代前半	あり	車椅子利用高齢者への外出サポート
D	女性	20代前半	なし	
E	女性	20代前半	あり	募金活動、迷子センターでの活動

表２　活動前後のVFI項目別平均点（n=5）

尺度	項目	活動前	活動後
参加動機	感情的安寧	4.4	6.0*
	利他主義	7.6	8.2
	職業上での成功	8.4	8.4
	社会的つながり	4.4	4.0
	知識の習得	9.0	9.4
	自尊心の高揚	6.2	7.8
	（合計）	33.3	36.5
ボランティア活動から得ている利益		20.8	22.4
ボランティア活動満足感		14.8	14.4

* $p<.05$

表３－１　学生補助員としての活動参加動機

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
地域活動へのレディネス	過去のボランティア活動経験	ボランティアサークルで障害を抱えながら地域で生活する人と接した経験がある
		過去に様々なボランティア活動をした経験がある
	対象者（高齢者）との交流機会・経験	部活動やアルバイトで高齢者の方と話す機会がある
		街中で高齢者に声をかけられる機会がコロナ禍以降はなくなった
		コロナ禍で親戚の集まりや近所の方との交流がなくなった
		実習で経験を積んでいればもっと積極的に高齢者に声をかけられたのではと思う
	活動内容への関心	高齢者と関わるのが好き
		もともと地域保健に関心があった
		運動が楽しそうだと思い参加した
		実習とは違いボランティアとして楽しく参加できればいいと思って活動した
	明確な活動参加動機	知識ばかりで経験が不足しているという危機感から参加した
		これまでチャレンジしなかったことだが学生生活最後の経験として参加した
		地域の方と交流したいと思って参加した
活動のしやすさとしづらさ	活動日の自由度	自由に参加の可否を決められて助かった
	活動内容や方法の保障	活動先への移動時に自転車を借りられてよかった
		活動先までの経路に不安があったが大丈夫だった
		具体的な活動内容が知れたらもっと参加しやすくなる
	活動しやすい時期	実習の時期を避けて参加できると思う
		自分の参加できる時期を選べてよかった
	活動しづらい時期	予定外の時期に活動することになって不安を感じた
		実習中に活動するのは難しい

表３－２　学生補助員としての活動から得た利益・満足感

カテゴリ	サブカテゴリ	コード
活動参加による自身へのメリット	勉強の息抜きとしての活動参加	活動が息抜きになった
		勉強の合間に身体を動かすきっかけになった
		活動が外出理由の一つだった
		勉強の日々の中で活動が楽しみになった
		今回の活動が勉強の息抜きになった
	活動中に見出された楽しみ	参加者の楽しそうな姿を見ながら声掛けをしながら楽しんで参加した
		実習ではなくボランティアとして健康な方に接することができて楽しかった
	活動を継続したい思い	今後継続していく活動に参加できないことが寂しい
	自身の健康への振り返り	自分自身の運動習慣の大切さを感じた
対人コミュニケーション機会からの学び	コミュニケーション機会の拡大	ペーパーペイシェントではなく実際の高齢者とのコミュニケーションでは予想外の反応がある
		待ち時間に参加者と話す機会が多かった
	コミュニケーションからの気づき	ペーパーペイシェントではなく実際の高齢者とコミュニケーションをとれて良かった
		もともと積極的なタイプではないが初めて参加して良かった
		相手の考え方やライフスタイルについて話を聞けたのが楽しかった
		実習で関わったことのない教員と関われて良かった
		コミュニケーションの場での学びが多かった
	コミュニケーションの課題	ふとした時の高齢者の寂しさの表出に戸惑い上手く対応できなかった
		運動時に一生懸命でも正しい動きができていない人への声掛けが難しい
		参加者へ注意するときの声掛けに戸惑った
		自分のコミュニケーション能力の低下を感じた
		初対面や年代の違う人とのコミュニケーションを学ばないといけないと感じた
活動を運営・推進する能力の必要性	健康課題や危機管理の必要性	見た目で分からない健康上のリスクに目を向けることが大事だと思った
		準備体操で転倒してしまうことにも注意しなければならない
	運営上の課題の明確化	最初は活動に緊張や戸惑いがあったので、事前に流れを共有したい
	臨機応変な対応の必要性	困った状況でも冷静に対応することができると良い
	周囲へ広めていく力	気楽に、近場で活動できるのでもっと参加者が増えると良い
		気楽な気持ちで後輩にも参加してみてほしい
		今回の活動が自分の身近な家族などに運動を促すきっかけの一つとなった
		活動時期にもよるが後輩にも活動を勧めたい
	主体的に学ぶ姿勢	活動回数を重ねることで積極的に自分から動ける
		自分からやれることを見つけて積極的にやっていきたい
		参加者に対する教員の対応と自らの言動を比較して学びとる
看護的視野の広がり	既習内容との繋がり	授業で習ったことを目の前で実感できてよかった
		実習と活動での学びが相互に活きる
	対象理解の深まり	できる限りのことをしながら地域で生活されているのを感じた
		高齢者の生き生きと暮らす様子を実感することができた
		自分が思っていた以上に生活に困難があっても地域で生活できるのだと感じた
		入院中の患者と地域で生活する高齢者の健康への認識の差に気が付いた
		臨地実習ができなかったので地域で暮らしている高齢者の実際を知れて良い機会だった
		疾患を抱えていても自分らしく生活している人たちの姿を見られてよかった
	対象者集団への理解の深まり	高齢者同士の関係性やグループの発達段階を実際に見て感じた
		コロナ禍でも高齢者が楽しそうに集まっているのが大事だと思った
		多くの方と接することで健康レベルの違いや地域特性の気付きがあった
	病院と地域における生活の繋がり	病院の看護以外の視野を広げる経験になる
		退院後の患者さんが送る地域での生活を捉えやすくなった
		実習で出会った患者さんの入院前の生活を考えることができた

動機として【地域活動へのレディネス】【活動のしやすさとしづらさ】の２つのカテゴリが明らかになった（**表３－１**）。以下、カテゴリは【　】、サブカテゴリは［　］、コードは「　」、実際の語りは“　”で示す。

看護学生自身の【地域活動へのレディネス】として、［過去のボランティア活動経験］や［対象者（高齢者）との交流機会･経験］があり、［活動内容への関心］［明確な活動参加動機］を認識していた。参加動機は、“看護の実習が終わって、本当に頭でっかちになってる自覚があって。知識ばっかりで経験が全然足りてないなと思って。少しでも経験として、体で動かして得たいなと思って。”“高齢者とのコミュニケーションとかも、本当に自分のおじいちゃん以外全然喋ってないですし。自分が動かないと、その経験を得る場所がないと思って、危機感で申し込んで”と語られた。活動中には、活動時期や内容などについて【活動のしやすさとしづらさ】を感じており、［活動日の自由度］［活動しやすい時期］［活動しづらい時期］などが挙げられた。

３．学生補助員としての活動を通して得た認識

活動前後でVFI尺度の各項目を比較したところ、合計得点は活動後に上昇しており、感情的安寧では有意な上昇（$p<.05$）が見られた。一方、有意差はないものの社会的つながりでは得点が下降した。ボランティアから得ている利益は活動前より活動後に得点が上昇し、満足感は得点が下降したが、共に有意差はみられなかった（**表２**）。

インタビューより、学生補助員としての活動から得た利益・満足感として【活動参加による自身へのメリット】【対人コミュニケーション機会からの学び】【活動を運営・促進する能力の必要性】【看護的視野の広がり】の４つのカテゴリが明らかになった（**表３－２**）。学生補助員として［勉強の息抜きとして活動参加］しており、「参加者の楽しそうな姿を見ながら声掛けをしながら楽しんで参加した」というように［活動中に見出された楽しみ］などを【活動参加による自身へのメリット】と感じていた。また、コロナ禍で目的無く外出することを控えていた者にとって「活動が外出理由の一つ」であり、「勉強の合間に身体を動かすきっかけになった」。

活動により［コミュニケーション機会の拡大］が生じ、［コミュニケーションからの気づき］や［コミュニケーションの課題］といった【対人コミュニケーションからの学び】があった。

また、学生補助員として、単に参加者と交流するだけでなく、地域老人クラブ活動自体や各活動日のプログラム運営などに関しても関心を寄せ、［健康課題や危機管理の必要性］［臨機応変な対応の必要性］［周囲へ広めていく力］［主体的に学ぶ姿勢］を認識し実践していた。

さらに、「実習で出会った患者さんの入院前の生活を考えることができた」「退院後の患者さんが送る地域での生活を捉えやすくなった」といった［病院と地域における生活の繋がり］を認識した。「高齢者の生き生きと暮らす様子を実感することができた」「多くの方と接することで健康レベルの違いや地域特性の気付きがあった」というように、個と集団の視点を持って［対象理解の深まり］と［対象集団への理解の深まり］がみられるなど、【看護的視野の広がり】が生じた。

Ⅳ．考察

学生補助員の特徴として、ほとんどに［過去のボランティア活動経験］があった。VFI尺度平均点では知識の習得や職業上での成功の項目で得点が高かったことと同様に、インタビュー結果からも活動を行うことへの［明確な活動動機］があり、【地域活動へのレディネス】を持った学生が、コロナ禍において更なる学習機会を求めて参加したという特徴が考えられる。【地域活動へのレディネス】が高いことで活動への期待感が高まり、［活動内容への関心］を持って参加する中で【活動参加による自身へのメリット】を認識し、さらに活動を充実させようと［主体的に学ぶ姿勢］が強化されるという好循環が生じていたと考えられる。

大学生におけるボランティア活動に関する動機の特徴として、知識の習得、利他主義、自尊心の高揚が高いことが明らかになっている（坂野 他，2002）。本研究では、知識の習得、職業上での成功、利他主義の順で高く、今回の学生補助員としての活動と、看護職という職業活動との結びつきがイメージしやすかったことが関連していると予測できる。活動参加前は知識の習得や職業上での成功など、看護職としての将来へのメリットを期待するニーズがあったが、活動後には感情的安寧の項目のみに有意な得点の上昇が見られた。インタビュー結果からは【看護的視野の広がり】が見られていたが、新たな知識の習得というよりも［既習内容との繋がり］の認識であったため、知識の習得で有意な得点上昇が見られなかったことの一因ではないかと考える。今回の学生補助員としての活動には、教

員が同行したものの、教員と学生という関係性ではなく、地域老人クラブ活動をサポートするスタッフとして協働した。つまり、活動後に学びを意味づけるような振り返りの場を持つ、活動報告書に対するリフレクションを行うといった教育的関わりは持たなかった。看護学生が、学生補助員としての体験を看護に関する学習機会として意味付ける上では、活動で得た認識の確認や活動姿勢に対するリフレクションやフィードバックの機会を持つことなども有用であると考える（田村 他，2014）。

学生補助員としての活動を通して得た認識として、VFI尺度における感情的安寧の有意な得点上昇については、インタビューで抽出された［勉強の息抜きとしての活動参加］［活動中に見出された楽しみ］というサブカテゴリとの関係が考えられる。活動により［コミュニケーション機会の拡大］が生じたことで、活動自体に楽しさを見出し、息抜きとして参加したことで感情的安寧を得て、［活動を継続したい思い］にも繋がっていた。看護職として対人支援を行っていくにあたって、他者との関わりから感情的安寧を得られる点は大きな強みとなりうる。また、活動を通して感情的安寧や【活動参加による自身へのメリット】を認識した背景には、コロナ禍での行動制限や不要不急の外出を控えて過ごしてきた社会的背景との関連も考えられる。「活動が外出理由の一つだった」というように、外出や他者との交流を、目的をもって行うことができ、その活動の中でさらに「自身の健康への振り返り」を行うといったメリットを得て、「活動を継続したい思い」に繋がっていたと考えられる。

さらに、学生補助員としての活動の場であった地域老人クラブは地域住民の主体的活動であり、学生補助員は与えられた役割をこなす姿勢ではなく、［主体的に学ぶ姿勢］で［健康課題や危機管理の必要性］、［臨機応変な対応の必要性］を認識した。地域老人クラブの特徴に加え、学生補助員が看護学部４年生であったことも、結果に影響したと考えられる。学生補助員として求められている役割を主体的に考えて活動し、【活動を運営・推進する能力の必要性】や、対象を理解してセルフケア能力の促進を支持する【看護的視野の広がり】を認識したと考える。

インタビュー結果から、「年代の違う人とのコミュニケーションを学ばないといけないと感じた」というように【対人コミュニケーション機会からの学び】が得られていた。また、学生補助員としての活動の中で「相手の考え方やライフスタイルについて話を聞けたのが楽しかった」というように、実習の中で看護を行うための情報収集としてではなく、人として向き合う姿勢でコミュニケーションを楽しんでいた様子が伺えた。本研究では高齢者側が、学生補助員の地域老人クラブ活動への参加やその中での交流をどのようにとらえていたかは明らかにしていないが、コロナ禍においても看護学生が地域老人クラブ活動参加者と交流する機会を通して、世代間交流の機会を創出できたと考える。しかし、有意差はないもののVFI尺度において「社会的つながり」とボランティア活動満足感では得点が下降した。これは、新型コロナウイルス感染症の拡大により当初の活動予定期間を縮小したことで十分な学生補助員としての活動機会が得られなかったこと、高齢者という参加者の特性から感染対策を徹底しながらの活動であり、マスク越しの会話のしづらさや表情の読み取りにくさといったコミュニケーションの困難さなども影響していると考えられる。

本研究は、対象者が少人数であったこと、ボランティア活動経験者が多くボランティア活動への動機付けが明確であったことなども結果に影響していることが考えられ、学生補助員としての活動による学習効果を検討するにはさらなる研究が必要である。しかし、コロナ禍において感染予防を徹底しながらも、学生が課外活動の機会を持ち、自身への利益や満足感等を認識していたことを明らかにした研究として一定の意義があると考える。

Ⅴ．結論

学生補助員として地域老人クラブ活動へ参加することによる自身へのメリットを認識し、学生補助員としてさらに活動を充実させようと主体的に学ぶ姿勢が強化されるという好循環が生じていた。学生補助員としての活動を通して対人コミュニケーション機会が拡大することで、感情的安寧をもたらした。地域住民の主体的活動であるという地域老人クラブの特徴や、対象者が看護学部４年生であったという特徴から、学生補助員は与えられた役割をこなすだけでなく主体的に学ぶ姿勢で、地域活動を運営・推進する能力の必要性や看護的視野の広がりを認識した。地域老人クラブ活動に学生補助員として参加することで、世代間交流やコミュニケーション機会の拡大といった利点が生じることに加え、今後は学生補助員のようなボランティア活動を通して看護学生に得られる学習効果についても検

討していくために、さらなる活動の展開と研究の発展が必要である。

謝辞

本研究にご協力いただいた研究対象者の皆様、学生補助員としての活動を受け入れてくださった地域老人クラブの皆様、本研究に関わってくださった全ての方々に深く感謝申し上げます。

本研究は、2021年度順天堂大学医療看護学部共同研究費の助成を受けて実施した。

利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

引用・参考文献

Clary, E. G., Snyder, M., Ridge, R. D., et al. (1998). Understanding and assessing the motivations of volunteers: A functional approach. Journal of Personality and Social Psychology, 74(6), 1516-1530.

平野聡, 武政睦子 (2020). 老人クラブに所属する地域在住高齢者における栄養状態. 川崎医療福祉学会誌, 30(1), 181-188.

抱井直子 (2015). 混合研究法入門質と量による統合のアート. 67, 医学書院.

公益財団法人全国老人クラブ連合会(2022). http://www.zenrouren.com/about/index.html (Dec. 22, 2023)

厚生労働省保健局・老健局 (2018). 高齢者の保健事業と介護予防の一体的実施について 資料. 厚生労働省ホームページ. https://www.mhlw.go.jp/content/12401000/000350583.pdf (Dec. 22, 2023)

増谷順子 (2017). 地域で暮らす若年性認知症者へのボランティアを通じた看護大学生に対する教育実践の検討. 老年看護学, 21(2), 67-74.

中川杏奈, 守田千純, 山田実佳, 他 (2015). 継続した被災地でのボランティア活動が現地の人々や看護学生に与える影響. 日本看護学会論文集 看護教育, 45, 71-74.

中島佳緒里, 大渡佳世, 奥村潤子 (2013). 仮設住宅におけるボランティア活動を通じた看護学生の学び. 日本赤十字豊田看護大学紀要, 8(1), 41-46.

坂野純子, 矢嶋裕樹, 中嶋和夫 (2002). 大学生におけるVolunteer Function Inventoryの交差妥当性の検討, 岡山県立大学保健福祉学部紀要, 9(1), 24-31.

坂野純子, 矢嶋裕樹, 中嶋和夫. (2004). 地域住民におけるボランティア活動への参加動機と満足感の関連性, 東京保健科学学会誌, 7(1), 17-24.

新村出編. (2018). 広辞苑第七版, 岩波書店.

曽根志穂, 武山雅志, 金谷雅代, 他 (2015). 被災地ボランティア活動が看護学生の自己イメージと社会人基礎力, 自己効力感に与える影響と学生の思い. 石川看護雑誌, 12, 115-125.

田村由美, 池西悦子 (2014). 看護の教育・実践にいかすリフレクション 豊かな看護を開く鍵. 南江堂.

吉澤裕世, 田中友規, 高橋競, 他 (2019). 地域在住高齢者における身体・文化・地域活動の重複実施とフレイルとの関係. 日本公衆衛生学会誌, 66(6), 306-316.

Research Report

Abstract

Characteristics and Perceptions of Nursing Students Who Participated as Student Assistants in Community Senior Citizens Club Activities During the COVID-19 Pandemic

Objective：This study aimed to clarify the characteristics and perceptions of nursing students who participated as student assistants in community senior citizens club activities during the COVID-19 pandemic.
Methods：The participants were 5 fourth-year nursing students. A mixed-methods approach was used to analyze quantitative and qualitative data obtained from self-administered questionnaires and interviews.
Results：The average scores on the Volunteer Functions Inventory (VFI) scale were highest for 'understanding', followed by 'career' and 'values', while 'protective', which had the lowest average score, showed a significant increase after the activities ($p < .05$). Six categories emerged from the participants' narratives:【Readiness for Community Activities】,【Ease and Difficulty of Engagement in Activities】,【Benefits to Oneself from Activity Participation】,【Learning from Interpersonal Communication Opportunities】,【Necessity of Skills to Operate and Promote Activities】, and【Expansion of a Nursing Perspective】.
Discussion：Readiness for community activities contributed to recognizing the benefits of engagement and a proactive learning attitude, creating a positive cycle. While the initial motivations for participation were 'understanding' and 'career', increased opportunities for interpersonal communication during the activities led to enhanced 'protective' and emotional well-being. Through active participation, participants shifted from merely fulfilling assigned roles to actively learning, recognizing the necessity of skills to operate and promote activities, and expanding their nursing perspectives.

Key words：COVID-19, senior citizens club, nursing student, volunteer

ITAI Mai, HARADA Shizuka, NAKAZATO Ryoko, SAKURAI Shinobu